

## 閻連科の小説に見る倫理

桑島道夫

はじめに

ここ数年、ノーベル文学賞候補として莫言の次とも目される中国人作家に閻連科がいる。解放軍出身の彼は、農村や軍隊生活に取材した小説で魯迅文学賞や老舎文学賞といった国内主要文学賞を総嘗めにしてきたが、枠に収まりきれないスケールの大きさが、度々当局から発禁処分を受けており、それがまた、欧米や日本から関心を持たれる要因の一つともなっている。そして2014年、彼はついにカフカ賞を受賞した。今欧米で最も注目されているアジアの作家の一人と言えよう。本論ではそうした閻連科の日本語訳になった作品を取り上げて、倫理や「翻訳」に関わる問題を考察してゆきたい。

なお、大躍進期、知識人改造を目的として作られた収容所を舞台として、宗教や知識人迫害、そして人食いといった問題が、聖書を彷彿とさせる文体で語られる作者畢生の大作『四書』は、まもなく拙訳で刊行されることになっているが<sup>1</sup>、今回は取り上げない。

### 1. 身障者／健常者＝人間以下／人間＝幸福／不幸？——『愉楽』

2004年刊行<sup>2</sup>の『愉楽』(原題：《受活》)<sup>3</sup>は、河南省西部・耙耨山脈の山奥にある、村人のほとんどが身体障害者という僻村・受活村が舞台。受活村は世間から見捨てられたように隔絶していたが、村人たちは食うに困らず、暢気に暮らししていた。真夏に大雪が降った年、村出身の健常者の柳が県長として村に救援にやってくる。権力に執着する彼はレーニンの遺体を買って記念館を建設し、観光産業の目玉にするという途方もない計画を持っていたが、その資金集めのために村人たちのなかから超絶的な技を持った者を選抜し、旅の一座を結成させる——。

耐えがたいのは受活村の身障者たちが、健常者たちから常に不条理に痛めつけられてきたことだ。そもそも大躍進期に国中が大飢饉になった際、村は県から食糧の供出を要請され、茅枝婆は県の幹部を引き連れて一軒一軒食糧を集めてまわったにも関わらず、鋤鍬を手に押し入ってきた健常者たちに食糧を強奪されるという、忌まわしい事件もあった。

生きるために強奪かい？ 法も何もあったもんじゃないのう。

何が法じゃ。完全人<sup>4</sup>であるわしらが、おまえら片輪らの法なんじゃ。人間様が飢え死にしとるのに何が法じゃ。<sup>5</sup>

茅枝婆の抗弁に、押し入ってきた健常者は耳も貸さず、開き直ったのだった。同様の不

<sup>1</sup> 岩波書店より刊行の予定。

<sup>2</sup> 中国本国での刊行年を基準としている。以下、雑誌発表(単行本未刊行)の場合も同様。

<sup>3</sup> 閻連科『愉楽』(谷川毅訳、河出書房新社、2014年)。本国では春風文芸出版社刊。

<sup>4</sup> 健常者のこと——引用者注。

<sup>5</sup> 注3上掲書、250頁。

条理は現代においても繰り返される。一座の最後の公演が終わった夜、稼いだ金のごっそり盗まれるのだが、事はそれだけに終わらず、レーニン記念堂に寝ていた村人たちは健常者である一座の運転手らに監禁され、法外な身の代金を要求されるのである。次に挙げるのは、茅枝婆と運転手のあいだで、これ以上金はない、いやもっと金はあるはずだ、という押し問答の末の場面。

「嘘だと思うなら、扉を開けて探してみるがいい」

「溝にハマって死ぬ。お前ら片輪が、わしら完全人をコケにできるとでも思うとのか？」

「お前ら、法の裁きは怖くないんか」

「完全人様こそ、おまえらの法じゃ」<sup>6</sup>

そして続けて、運転手によって、金を盗んだ犯人は省長に呼び出されて不在の県長以外の、県の役人たちだったという驚くべき事実が明かされるのである。しかも運転手は、監禁を解くことと引き換えに村人たちが持っている有り金すべてと茅枝婆の孫娘を差し出すように要求する。茅枝婆がやむなく応じると、彼は約束を反故にして孫娘たちを強姦してしまう。

救いようのない展開なのだが、立ち止まってじっくり読んでみると、作者はやはり身障者の側に立っていることが良く分かる。注目すべきなのは、受活村の人びとにとって、厄災は常に外の世界からやってくるということだ（「受活」とは北方方言で、楽しむ、享受する、愉快、痛快といった意味）。1969年、文化大革命の批判闘争（公衆の面前での吊り上げ）が始まって3年後、公社は耙耨の奥深くに受活村があることを思い出し、急いで茅枝婆に、村に地主や富農はいないか問い合わせる。茅枝婆が村には地主も富農もいないと答えると、公社のカクメイは受活村が革命の歴史のなかで漏れ落ちていた事実思い至りながら、その年の秋までに地主、富農、貧農下層中農に分けるように指示する。だからといって線引きできるはずもなかったが、茅枝婆はありもしない罪状を言わせるために村の者がリンチに遭うのを見かねて、自分を地主にすれば良からうと名乗り出る。おかげでカクメイは大喜びで茅枝婆を批判闘争にかけるのだった。

秋の太陽は天空で黄色く明るく輝き、とろ火でコトコト暖められていた。砂利の上の人々は十里、二十里、あるいは数十里先の村から駆けつけて来た村人であり、大会に参加し、市に行くため、河川敷は水も漏らさぬ混み具合だった。胸の前の赤表紙は一面火の海となり、その賑やかな光景は、その三十年後、受活村の人々が魂魄山の絶技の公演をするまで、誰も見たことがなかった。人々は肩をぶつけながら押し合いへし合いし、がなり声ががなり声を呼び、万馬斉鳴といったところだった。<sup>7</sup>

そうした「空前絶後の光景」のなか、がんじがらめに縛られた茅枝婆がカクメイによっ

---

<sup>6</sup> 注3 上掲書、343頁。

<sup>7</sup> 注3 上掲書、329-330頁。

て舞台の前に引きずり出される。

ここで留意したいのは、「空前絶後の光景」として文革の狂気と現代の村起こし＝絶技団の公演が結びつけられていることだ。30年前、茅枝婆は共産党の理想に共鳴し、それまで自給自足の生活をしていた受活村を無理矢理人民公社に参加させ、結果、外の世界からもたらされた大躍進運動や文化大革命によって、村の身障者たちが略奪や屈辱的な扱いを受けることになった。村出身とはいえ、権力欲に取り憑かれ、レーニンの遺体を持ってくることで世界中から観光客を呼び込もうと企て、そのためには村の身障者たちを見世物にすることも厭わない柳県長にも、茅枝婆は大躍進運動や文化大革命と同じ危うさを感じていたということなのだろう。

実際、柳県長の発案による受活村の狂躁は、レーニンの遺体の買い出し部隊が北京で拘束されることであえなく終焉を迎える。政治生命を絶たれ、落胆を胸に家に戻ってきた柳県長は、妻と秘書の不倫の現場を目の当たりにし、二人を追い出す。出世にかまけて家庭を顧みない夫は妻から愛想をつかさされたのだった。

ただ、政治的にもはや降格しかない柳は、恩義を感じた秘書の流言によって街中の人々から跪かれることになる。そうして良心に目覚めた彼は、庁舎で最後の常任委員会を開き、半ば強引に、受活村の公社からの退社を決める。まさに人間万事塞翁が馬、おまけは退庁時に交通事故に遭い、晴れて受活村に居を構えられるようになったことだ。

受活村に住む身障者たちは身体的には「人間以下」だが、文革にしろ、現代の経済発展至上主義にしろ、倫理の欠如した世界に住む健全者たちより、よほどまっとうな人間であり、幸福なのではないか？—閻連科が問いかけたかったのはそういうことなのだろう。閻連科は、これまた実に諧謔に満ちた筆致とそれにふさわしい文体で、価値観を顛倒してみせたのである。

## 2. 毛沢東時代の倫理規範からの解放——『人民に奉仕する』

2005年発表の『人民に奉仕する』（原題：《為人民服務》）<sup>8</sup>では、軍の師団長邸で働く炊事係の男・呉大旺と師団長の若く美しい妻・劉蓮の禁断の情事が描かれている。性描写の過激さと毛沢東や「人民に奉仕する」崇高な精神——中国共産党と人民解放軍が守るべき規律・基本理念を表す、最も人口に膾炙したスローガン——に対する侮辱を理由に発禁処分を受けたのだが、この明らかに「チャタレイ夫人の恋人」を換骨奪胎した挑発作は、ある性的倫理の逸脱が「翻訳」されて他国で受容される際にどのような摩擦が起こるのかを示す、格好の事例と言えよう。

しかし、センセーショナルに、政治的に取り上げられる一方、次に挙げる大江健三郎の『人民に奉仕する』評は、閻連科のパロディ化という手法や批評性、そして何より人間の描き方が本物であることを、古今東西の文学へ通じた作家ならではの確信で言い当てている。

---

<sup>8</sup> 閻連科『人民に奉仕する』（谷川毅訳、文藝春秋、2006年）。本国での初出は《花城》2005年第1期。

「毛語録」の一句をパロディー化して、寒村出身の若い兵士の、美しい上官夫人への奉仕<sup>サーヴィス</sup>が性的に逸脱する成り行きを描くのですが、文化大革命時の時代閉塞を爆発的に引っくり返す批評性と、人間観の切実さは生き生きと伝わりました。中国の知識人の懐の深さを思います。(「不明不暗の「虚妄」のうちに」<sup>9</sup>)

「人民に奉仕する」(「為人民服務」)はそもそも、1939年から45年にかけての毛沢東の講演録『老三篇』に収められた一文である。そのなかで毛沢東は、今後自分たちの部隊においては、炊事員であろうと兵士であろうと、いくらかでも有益な仕事をした者であれば、必ず弔い、追悼集会を開くべきことを説いている。呉大旺＝炊事係という作者の設定にはおのずとその文脈が意識されているはずなのである。

呉大旺は劉蓮から、“人民に奉仕する”の木札がいつもの場所になかったときは用事があるので二階の自分の寝室に上がってくるようにと命ぜられる。そして実際、初めてその命令が実行に移され、呉大旺が恐る恐る劉蓮の寝室に入ってゆくと、部屋はこれ見よがしなところがなかったために彼は心から感動し、以前、中隊で教育された際に覚えた、質素を奨励したり延安精神の継承・発展を説いたりする警句・名句や社説を思い出す。ここで注目すべきなのは、彼が一時的に失語症に陥ったことである。

しかしそれらの言葉は、文章として読むのはいいが、日常生活の中で口に出すのは、生煮えの御飯か古くなったスープのようで、どこかしら酸っぱいように感じた。<sup>10</sup>

呉大旺は、劉蓮に対する崇敬の念を捧げようという肝心なときにそれらの大げさで陳腐な決まり文句は使えないことに思い至り、黄金やダイヤモンドに値する感動的な言葉を探し出そうとするが、結局適当な言葉が見つからない。これまで呉大旺の人格や行動のすべてを律してきた倫理規範が、すでに愛情と言ってもいい崇敬の念を表すにあたって何の役にも立たないことを、端的に示していると言えよう。逆に言えば、このときまさに呉大旺に、洗脳からの解放の端緒が開かれたのである。

心ゆくまでの性交のあと、夫が性的に不能であることを劉蓮が呉大旺に告白し、二人の関係は親密さを増すが、二人が毛沢東のフレーズを使って睦言を交わし合うシーンは絶妙である。次に挙げる毛沢東精神へのパロディは、作者の確信犯的な挑発性と確かな批評性が感じられるのだ。

台所に入ったとき、食卓の上に“人民に奉仕する”の木札があるのを見て、二人は顔を見合わせて笑い、彼は言った。「“人民に奉仕する”——座って休んで」

彼女は言った。「“私利私欲と戦い修正主義を批判せよ”——あなたの方が疲れてるんだから、あなたが座って休んでちょうだい」

彼は言った。「我々は全国からやってきて、ひとつの共同の革命の目標のためにや

<sup>9</sup> 大江健三郎『定義集』、朝日新聞出版、2012年、150頁。

<sup>10</sup> 注8上掲書、16頁。

ってきて一緒になった”——一緒にごはんを作ろうか」

「“人民、人民だけが、歴史を創造する動力である”——一緒を作ってどちらが上手か競争しましょ」<sup>11</sup>

さらにまた、劉蓮との関係を一步前に踏み出させる原動力が「いわゆる道徳とか倫理闘争といったものではなく、ただ運命に挑戦する勇気と力」<sup>12</sup>であるとすれば、階級への恨み＝ルサンチマンを潜ませるあたりも、極貧のなかでもの言えぬ農民として育ち、貧しさから逃れるようにして解放軍に入り、結果、作家となった閻連科ならではの視点と言えよう。呉大旺の、報復あるいは仇討ちの衝動へのスイッチが入るや、二人の性交はあたかも獣のようにエスカレートし、毛沢東語録の標語を書いた額や石膏の胸像さえも砕いてしまうのだった。

ただ、二人がみずからの純愛を証明するために毛沢東の胸像を破壊するという設定は確かに圧巻とはいえ、スローガンを都合良く解釈する軍隊内部事情の暴露や、禁断の情事が実は性的不能の師団長も共犯だったと思わせる書きぶりも、当局の怒りに触れたであろうことは想像に難くない。

いずれにせよ、そこには毛沢東という偶像の破壊があり、延安において戦時の特殊な必要性から生まれ、延いては文化大革命にもつながってゆく毛沢東時代の精神・倫理規範の破壊がある。

### 3. 閉塞、因習を超えた愛と恩讐、そして新たな創世——『丁庄の夢』

2006年刊行の『丁庄の夢』(原題：《丁庄夢》)<sup>13</sup>は、河南省東部黄河沿いの貧村・丁庄が舞台。売血のため村中の農民がエイズに感染してしまった実在の「エイズ村」での取材が基になっている。長らく学校の代用教員を務め、村人たちから尊敬される祖父・丁水陽と、県上層部の大々的な売血運動を背景に、「血頭」として血を買い取って回り、死者が出始めるや棺桶を売って暴利を得た父・丁輝の葛藤を軸として、村が壊滅に向かう状況が、すでにこの世にいない孫——村人から恨みを買って毒殺されたのだった——の視点から語られる。

売血をしたことのない者に病気が伝染することを危惧した県の上層部は、患者たちをただちに一箇所に集めて住ませよう、丁水陽に要請する。そこで丁水陽は学校で患者たちと共同生活を始めるのだが、父と子の葛藤は患者たちに不治の病であることを告知するかどうかで表面化する。丁水陽は慰み事にと村の者たちを学校に集め、患者馬香林の墜子(河南省の歌物語)を聴かせる会を催す。

趙秀芹は祖父に向かって大声で言った。「はっきりさせてほしい。熱病を治す新薬はあるのか、ないのか。私は村の連中のように騙されないからね」

<sup>11</sup> 注8上掲書、92頁。

<sup>12</sup> 同上、63頁。

<sup>13</sup> 閻連科『丁庄の夢』(谷川毅訳、河出書房新社、2007年)。本国では上海文芸出版社刊。

「これまでずっと先生をしてきた。わしが嘘を言うと思うか？」

「だがな、あんたのところの長男の丁輝が後ろで、熱病を治す薬の話など聞いたことがないと言ってるぞ」。王宝山は詰問するように言うと、頭を後ろへねじった。

それにつられて丁庄の人々も後ろを見た。父が妹の英子を連れて後ろに立っているのが見えた。<sup>14</sup>

会場が突き刺すような静けさに包まれるなか、丁輝は父に、村の者を騙していったいどうするつもりか、と現実を突きつける。公衆の面前で面子をつぶされた父は、衝動的に息子の首を絞めるのだった。

この場面で、魯迅が終生提起してきた問題、すなわち、窓一つなく壊すこともできない鉄の部屋で熟睡している人びとを起すべきか否か（「呐喊自序」）、あるいは「人生でいちばん苦痛なことは、夢から醒めて行くべき道がないことでもあります。夢を見ている人は幸福です。もし行くべき道が見つからなかったならば、その人呼び醒まさないでやるのが大切です」（「ノラは家出してからどうなったか」<sup>15</sup>）を想起するのは、私だけではないはずである。とすれば、ここには作者の中国社会、とりわけ農村の閉塞した状況や後進性に対する歴史的・文化的なスパンからの深い憂慮を読み取ることができるだろう。

三度の食事に事欠かぬ「天国」のような日々のなかでの盗み、まわりに流されやすい性格（村長の妻は村人たちが競うように血を売るなかで、「血ぐらい売れんで、あんた男と言えるのかね？」と迫る）、他人の迷惑を一切顧みない利己心（食糧を一律に徴収した際、中に煉瓦が混入されていた）、魯迅が歎いた、「残酷」を娯楽とし、「他人の苦痛」を見世物にして、慰安にする「暴君の臣民」の暴虐性（先のないエイズ患者どうし、義兄の丁亮と男女の関係を持ってしまった玲玲に対して、「芝居が終わってもらっては困る」という理由から、まわりの者たちは、病气持ちの妻を見捨てた夫・丁小明に通報し、玲玲にさらなる辱めを受けさせる）、そして“脱貧致富”を求めるあまり、人倫にもとる行いも厭わない丁輝……ここには確かに魯迅も指摘してきたような歴史的文化的後進性や、改革開放路線以後のゆがんだ経済発展への厳しい眼差しがある。

一方、「賊愛」と罵られながらも、自分たちの愛情を貫き通そうとする二人のありようはむしろ「純愛」と呼べるほどだ。

叔父さんは言った。「行くな」

玲玲は叔父さんを見た。

「宋婷婷はわしと離婚したがっつるし、丁小明はお前と離婚したがっつる。両方離婚してわしらは一緒になるんだ」

玲玲は黙り込んだ。叔父さんは目を潤ませて続けた。「もう何日も生きられんのだ。うわさじゃ、今年の冬に熱病が爆発的に広がるということだ。わしもおまえも今年を乗り切るとは難しいじゃろう。人間らしく生きるというだけでなく、二人が死んだら一緒に埋めてほしい。死んでも一緒にいたいんだ」（中略）「一緒に住んどるところ

<sup>14</sup> 注 13 上掲書、54 頁。

<sup>15</sup> 引用は竹内好訳、『魯迅評論集』、岩波文庫、1981 年、142 頁。

を見せてやるんだ。丁小明らにも見せてやるんだ。宋婷婷や村の連中にも見せびらかしてやる」<sup>16</sup>

世間のしきたりを超えたところで結ばれるという点では、莫言『赤い高粱』の祖父と祖母と同様であり、また『丁庄の夢』のエンディングで提示される新たな創世への胎動を思わせるものがある。しかしそれだけに、二人を永遠に分かつ死はあまりに突然、哀切である。

しかし二人の死を合図にするかのように、大干魘、熱病の大爆発、丁輝の息子である「私」の陰親（死者どうしの婚姻）、丁水陽による丁輝の撲殺等々の事件が、矢継ぎ早に起こる。そして祖父の人倫にもとる行いを救うべく雨が降り出し、「畑も荒れ地も黄河古道の砂丘の上にも緑が萌え始め」<sup>17</sup>のだった。そこで、小説の冒頭に引かれた『旧約聖書』に呼応するかのように、新たな創世が暗示されて物語は終わる。

それにしても気宇壮大な物語である。死者と生者の対話や、現実を先取りする祖父の夢などに、魔術的リアリズムの特徴を見出せるのだが、中国文明発祥の地に生まれ育ち、歴史の古層とつながる中国僻村の人びとの生存感覚・死生観（たとえば来世の家として、村人たちは棺桶に固執する）は、ラテンアメリカ文学によって開花した手法によってこそ表現しうるのだろう。

---

<sup>16</sup> 注13 上掲書、206頁。

<sup>17</sup> 引用は注13 上掲書、342頁。